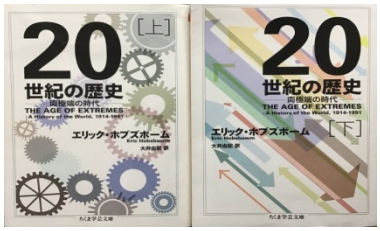
20 世紀の歴史

写真は歴史家・エリック・ホブズボームによる大著の翻訳である。上下 1300 ページ余りあり、昨年 11 月から研究会で読んできた。最終章にたどり着いたので、私なりの感想を綴りたい。



それにしても大著なので、表紙カバー裏を借りて、本書をコンパクトに紹介しておきたい。上巻では―イギリスを代表する歴史家が、自身の生涯と重ねながら著した 20 世紀史の傑作。時代の出来事が固有の形をもって展開したことを該博な知識とともに叙述する力は、およそ他の追随を許さない。1914 年の第一次世大戦勃発から 1991 年のソ連崩壊までを「短い 20 世紀」とする時代概念。それは、本書によってつくられた。上巻には、第一次大戦による総力戦時代の幕開けと世界革命、経済恐慌、第二次世界大戦などを扱った第Ⅰ部（「破滅の時代」）と、東西間の冷戦と戦後の繁栄に迫った第Ⅱ部（「黄金の時代」）を収める。

下巻では―市場経済による社会的不平等、宗教的原理主義、環境問題‥‥。繁栄の時代が過ぎた後、人々は社会を支えてきた基盤が解体する音を聞く。不安定性と不確実性がいやます 20 世紀末を見つつ、ホブズボームは述べる。「新しい千世紀、人類の運命は公的な機能が復活できるか否かにかかっている」と。下巻には、第Ⅱ部（「黄金時代」の続きとして、第二次世界大戦後における社会と文化の変革、第三世界の姿を、そして、1970 年代以降に生じた新たな危機と社会主義の終焉、21 紀への展望などを論じた第Ⅲ部（「地滑り」）を収める。

この大著を昨年 11 月から半年間、京都で宮本憲一先生とゼミ卒業生らと読み、報告を受けて議論してきた。一人では読み飛ばしてしまうが、宮本先生の鋭いコメントで、久しぶりに「歴史」「20 世紀史」をじっくり味わえた。2 点だけ感想を書いておきたい。

第 1 に、時間軸と空間（地域）軸という二つの軸から、20 世紀の世界を概観することができた。こうした歴史書を何冊か読んできたが、これほど世界を多面的・重層的に把握できたのも珍しい。これは著者のポブズボーム(1917―2012 年、ポーランド系ユダヤ人を父とし、オーストリア人を母としてエジプトに生まれる、イギリスの歴史家)によるところが大きい。第 1・2・3 世界という、3 つの世界の光と影、相互の関係を 2 つの軸から描いているところが印象に残る。3 つの世界の今後の展開にも注目したい。

第 2 に、20 世紀の世界のなかで、日本という国の「歴史と現在」を考えさせられた。この 20 世紀は、わが父母のもとで生まれ育ち、私が歩んできた時代だ。まさに自分史でもある。とかく「日本」という国、地域レベルで考えてしまうが、アジアをはじめとした、20 世紀の歴史のなかで生きてきたことを、本書を研究会で読み進むなかで思い知らされた。現代に生きる多くの人に読んでもらいたい「20 世紀史」である。

(2019 年 7 月 13 日)